別府に没した〝新しい女性〟
辛島キミ　三十年の生涯を追う

白土康代

かそかなる光をあてに今日もゆくつかれたる
身に長き旅かな

辛島キミ（きみ、きみ子、公子とも）は、日本女性として専門的に哲学を修めた最初の人である。大正時代に、いち早く女性を受け入れた東洋大学の印度哲学倫理学科を首席で卒業している。大正十一年のことである。温泉の町として知られる別府の旅館の娘であった。

辛島きみ
（「読売新聞」大正11年3月24日）

別府の紅葉館

辛島キミは明治二十九年二月十一日に大分県宇佐郡駅館村で生まれた。六人弟妹の長女である。

父は辛島虎次郎（慶応元年～大正十二年）。宇佐郡駅館村の名家の生まれ。明治三十年初めに別府に移住。紅葉館を経営する。明治三十二年、全国遊説中の総理大臣伊藤博文の歓迎会が「新築の」紅葉館において開かれた。開業はこのころと思われる。紅葉館は、別府の数多くの旅館の中でも政財界の要人が利用する高級旅館のひとつであった。

紅葉館（『別府温泉画報』東洋写真画報、1924年）

母親は早くに死別ということ以外何も判明していない。「女人群像長望記述」（東洋大学新聞　昭和五年六月七日）には「湯の町別府に呱々の声を揚げて間もなく母を失い定石通り薄倖の第一歩を踏み出した。母亡きあと父の内助を勤むるホテル

紅葉館の女将、女中相手に長煙管をくわえて」とある。高級旅館には万事を差配する女将が必要だが、キミがどの程度旅館経営に携わっていたかは不明である。少なくとも大正九年（キミ二十四歳）には、旅館主として届けられている。しかし当時、キミは東洋大学在籍中の身である。何らかの複雑な家庭的事情があったと思われるが調査しきれていない。

このころに作られたキミの歌に以下のようなものがある。

白萩のさかりの頃の秋の日に家をさびしみ出
でし身ながら

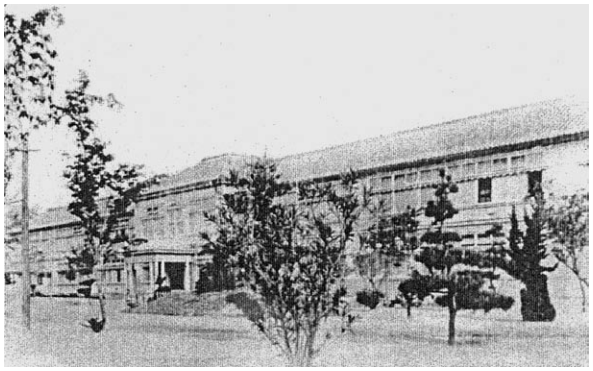
三界に家なき家をたづねつつ暮れては道のい
そがるるかな

これらの歌には、単に母のいない家庭という以上のさびしさが感じられる。旅館の女主人でありながら我が身を「三界に家なき」としているのはなぜだったのだろうか。

大分高女時代

大正二年（キミ十七歳）、大分県立高等女学校卒業。大分県立高等女学校は明治三十三年に創立された県下最初の女子の高等教育機関である。明治政府の方針により、他の女学校と同様に、良妻賢母を育てることを目指してはいたが、裁縫の授業などと同時に、外国語、歴史、数学の授業が行われるなど、進歩的な校風であった。北原白秋の二人の妻、歌人の江口章子、佐藤菊子がともに同校の卒業生であることは知られている。

『同窓会誌』の消息欄「雁のつて」には、辛島キミが「クラス一の気焔家で」「皆がさかんに連絡を待っているがなしのつぶて」などとあり、高女時代のキミの「新しい女」としての片鱗がうかがわれる。大正十一年には母校を訪ねて、近況報告などを行っている。「今夏御帰省、学校にもお見えになりました。東洋大学女生徒中、首席ですと。ます



大分県立高等女学校（『大分今昔』大分合同新聞社、1964年）

ますお奮い遊ばせ」とあった。大学卒業を前に母校に挨拶に出かけたのであろうか。

『第一高女85年の歩み』には、名をなした卒業生として、九州大学女子医専博士第一号である佐藤イクヨ、前田夕暮に師事した歌人尾家歌子の二人が写真入りで紹介されている。二人ともキミと同じ第十回生であるが、キミについての紹介はなかった。

東京の「西ヶ原グループ」

大分高女を卒業後、「各所の高等の専門教育を修めた」と聞くが、具体的な学校名などは判明していない。あるいは父の旅館経営を助けつつも「女中相手に長煙管をくわえて一生を」送ることを「伸びんとする自己の侮辱」と感じ、別府と東京を行き来していたのかもしれない。

大正四年の『青鞜』購読者名簿にキミの名がみえることから、このころ、キミの求めていたものをわずかに伺い知ることができる。

ただ「西ヶ原グループ」に参加していたという記録がある。「西ヶ原グループ」とは、大分出身の画家、片多徳郎（明治二十二年～昭和九年）の周りに集まった芸術家グループのことである。片多が大正四年から十二年にかけて東京駒込西ヶ原に居を構えていたことからそう呼ばれた。

当時の片多の画業は充実していた。大正三年の文展に「夏山急雨」が入選し褒状を受け、大正六年には「伎女舞踏団」が特選になり、さらに翌年には「花下竹人」が特選、その翌年には最高傑作といわれる「霹靂（へきれき）」が第一回帝展で〝推薦〟となっている。大正十年には帝展審査員に推されるなど、画家として、もっとも脂の乗り切った時期であった。この片多の西ヶ原の家に、大分出身の若い芸術家たち、権藤種男、保田善作、後藤真吉、江藤純平、彫刻の日名子実三など多士済々のメンバーが集まり、芸術論を交わしていた。北原白秋に弟子入りしていた歌人の三浦義一もメンバーであった。

東洋大学哲学科に入学

大正七年（キミ二十二歳）、東洋大学大学部哲学科に入学。高女卒業後、五年が過ぎていた。

東洋大学は仏教哲学者、井上円了が明治二十年に設立した哲学館を前身とする。

※東洋大学は正式には専門学校令により男子専門学校として認可を受けた私立大学。大学令による認可は昭和三年

大正四年に日本で最初に女性を受け入れた大学として知られる。その最初の女性、栗山津彌は国文学科を卒業後、文検（中等教員免許の検定試験）に合格し、東京府立第五中学校に赴任。日本の教育史上初めて男子中学校で教えた女性の教師となる。

大正九年、栗山津彌の卒業を送るため、二回生であったキミは、同級生を誘って「学術の研究と相互の親睦を目的とするところの女生（ママ）の会」を設立する。初の女性の卒業生を「曙の光と仰ぎ」、「あけぼの会」と名付け、以後、例会を開く。会には学生だけでなく、学長、教授陣も出席している。その中には、『古寺巡礼』を出版したばかりの和辻哲郎の名前も見える。

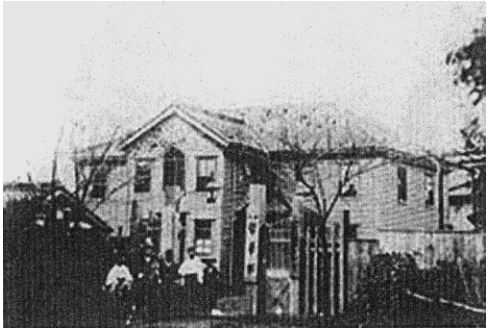
キミが卒業する大正十一年一月二十五日には「あけぼの会」による「辛島キミ送別会」が行われた。キミの猛勉強ぶりについては先の「女人群像長望記述」には「三日半日読書に熱中して死に瀕した」というエピソードが記されている。

こうしたことから、希望的推論だが、充実した学生生活を送ったと感じる。

大正十一年三月二十五日、二十七歳で大学部印度哲学倫理学科の卒業生二十二人中、首席で卒業。新聞に「首席で東洋大学を卒業する女哲学士」と大きく取り上げられた。

「今回の修了者中たった一人の婦人卒業生として出る辛島きみ子さんは明治二十九年生まれで二十七歳ですが、郷里の大分高等女学校を了ると各所に高等の専門教育を修め本大学には大正七年の春に大学部の哲学科に来て、爾来四年間の課程を踏み此度芽出度（めでたく）卒業することになったのです」という東洋大学の幹事、郷白巌の言葉が掲載されている。（読売新聞大正十一年三月二十四日）

記事には「女学校教師の招請を断って、紡績工女の教育に従ふ決心」とあった。当時、大手の各紡績工場は工場内に「高


哲学館（東洋大学井上円了研究センター所蔵）

東洋大学、授業風景（東洋大学井上円了研究センター所蔵）

等女学校令」に準じた女学校を設けていた。キミはこうした女学校で教鞭をとることを望み、取材に対して「これからは一生、書生で暮らします」と答えている。

大正十一年発行の「雁のつて」には現住所が「東京都外向島鐘紡支店内」となっているので、鐘紡が工場内に設けていた女学校の教師になったということは十分に考えられる。が、大正十二年には父親が死亡し、父に代わって別府で旅館経営に携わっていることから、疑問も残る。いずれにせよ、一生を「書生」として暮らしたいというキミの願いが果たされることはなかった。

旅館経営とその身辺

大正十三年春、友人の辻潤（明治十七年～昭和十九年、ダダイスムの評論家、思想家）が来別。紅葉館で「酒と寝床にありつき」、その様子を書き残している。いかにもダダイストらしい夢想にふける辻潤に、「忙しいからそんなくだらない話なんか聴いてはいられないことよ」「よくあなたの書くような馬鹿な原稿がお金になるわね」と言い放つなど、二人の会話からは、むしろ現実的な、旅館の女将としてきぱきと働くキミの姿が浮かぶ。

キミの専門は印度哲学であるが、辻潤の「クンシ（キミのあだ名）は僕の友達なのだが、ペルシアの哲学に凝り固まって気がおかしくなってホテルを開いている」、また同じくダダイストの詩人、高橋新吉（明治三十四年～昭和六十二年）の「気がおかしくなってというのは辻潤の出鱈目（でたらめ）である。辛島キミは理性的な聡明な女で（略）、ペルシア哲学というのはオムマハヤムのルバイヤットであったようだ」といった発言を信じるなら、広くペルシア哲学にも大いに関心をもっていたようである。キミの卒論などは残念ながら、発見していない。それにしても「ペルシアの哲学に凝り固まって気がおかしくなった」とまで辻が評したキミの胸中はどうであったのだろうか。

この前の年、父が亡くなったこと、またその年、関東大震災に遭遇した妹を案じて上京しているが、青春の地である東京の無残な姿を目にしたことなどが、キミになんらかの影響を与えたのだろうか。いずれにしても旅館経営、幼い弟妹五人の生活はキミ一人の肩にかかったのである。

地震に対し「別府温泉旅館　紅葉館　辛島きみ」の名で「謹而罹災地御得意様並びに知友皆様に篤く御見舞申しあげます」という新聞広告（東京朝日新聞　大正十二年九月二十二

日）を出している。「知友」に並ぶ「御得意様」という言葉に、温泉郷の旅館経営者としての立場が推し量られる。

別府を訪れた辻潤は、また同市在住の三浦義一を訪ねた。「着古した和服の着流し姿で、ポツポツと静かな口調で盃を含みながら話す姿」が記録されている。辻、四十歳、義一は二十六歳である。

三浦義一（明治三十一年～昭和四十六年）は、大分出身の歌人である。旧制大分中学から早稲田予科に進み、文学を志す。門下生として北原白秋の家に住み込み、歌の道にはげむ。父、三浦数平は、大分市長（大正六年～大正十五年）のちに衆議院議員を務めた人物である。

大分県の文化史において、義一は大正期に「青弦」「蜜柑の花」「トロイカ」などの同人誌を出し、「和歌革新運動のリーダー」と位置付けられている。とはいえ、一般的には、義一は歌人としてよりは、むしろ右翼の活動家、フィクサーとして知られる。

昭和七年、大亜義盟を創立。宮内省御用菓子屋の不敬を糾弾して、十四ヵ月の拘禁をうけた虎屋恐喝事件、天皇機関説を唱えた美濃部博士狙撃事件（昭和十年）をはじめ、いくつもの事件を起こし、たびたび収監される。戦後は政財界の黒幕と見なされ、東京日本橋の室町に事務所をかまえたことから、室町将軍とも呼ばれた。

だがそれは後年のことで、辻が、義一を訪ねたのは、歌人としての義一であり、キミとの繋がりからだろう。この時期、病療養中の義一とキミは同居していた。

キミと義一の出会いは、彼が歌の道に勤しんでいた「西ヶ原グループ」においてだと推察するが、詳細は不明である。

大正十四年、義一は『不知火』を創刊している。同人は山下鉄之輔をはじめとする旧制大分中学の関係者が多く、画家の佐藤敬、音楽家の園田清秀なども参加した。キミも同人である。

「雁のつて」（大正十四年）にはキミの消息として「昨年秋より病床にありましたが、この十一月から同好の人数人と文芸雑誌『不知火』を発行しています。第八回丸山待子氏、十回二組の安部さなおさん等も同人であります。熱心な誌友を希望していますとか」とあった。

この時期、高橋新吉にあてたハガキに「私は気永く静かにまだ寝ています。とうてい起きて歩く様な事には二三年なれそうにもありません。或いは永久にそんな事は出来ないかも知れませんが、天気のいい日など時々縁に出て青い空を見春

日の中に舞っている小さき虫共を見ているとたまらなく此の一日が尊くめぐみに充ちているのを感じます」とある。

しかし哲学から歌の道へと歩き始めたと思われるキミが病床から離れることは二度となかったのである。

『不知火』第二年第一号（大正十五年一月二十日）の発行所は、キミと義一が共に住んでいた別府市浜脇矢ノ林迦久礼山草房。これより少し前、別府市内においてキミは何度か引っ越しをしている。経営難に陥った紅葉館が人手にわたり、家を移ったものと思われる。

キミと義一は入籍をした夫婦ではなかったが、キミを「妻」と記している評伝もある。なにより義一自身が、「妻」キミを詠んだ歌をいくつも残している。

この世の思ひしげきときあまへ言の愛ぐしき
汝よ瞼撫でやらむ

『不知火』第二年第一号の裏表紙には黒枠で「亡妻辛島公子儀永ラク病中ノ処養生相不叶一月十九日午前零時拾死去仕候間此段生前辱知諸氏ニ御通告申上候　大正十五年一月十九日　三浦義一」とあり、キミがこの世を去ったことを知らせていた。戒名は慧眼院眞諦円明大姉。

病床においてキミはいくつもの歌を詠んでいる。大輪の花を咲かすことはなくとも、この世への「しげき思い」を秘めた〝小さき菫（すみれ）〟は咲いたと信じたい。

三浦義一（「続悲天」掲載）

花遂に開くことなく枝枯れぬ春枕頭のわびしき春かな

春の雨ついぢ程よくしめる処菫は小さく咲きてをるかな

義一はキミの死後、キミの妹うめと結婚、義弟たちにも愛情を注いでいる。

スミレ小さく咲いて

現在、辛島キミの名を文学事典などで目にすることがある

とすれば、それは野溝七生子の傍だろう。作家、比較文学者として知られる野溝（明治三十年～昭和六十二年）は、大分県立高等女学校を卒業後、同志社大学英語専門部予科から東洋大学へ進んでいる。それはキミの誘いがあったからだと野溝自身が述べている。

野溝は学生時代『山梔（くちなし）』（大正十二年）により作家デビュー。多くの作品を残し、八十九歳まで生きた。それに対し、大学卒業後、志を果たすことなく、わずか四年あまりでこの世を去った辛島キミの存在が、故郷においてさえまったく忘れられてきたのは仕方のないことだろう。わずかに『別府今昔』に記録された以下のような姿を残すだけである。

紅葉館の娘キミとその友人の野溝ナオという二人の女性は別府における「新しい女性」運動に大きな役割を残した。キミは三弦に特殊な才能を持ち、自分で深編みがさをかむり、「こむそう姿」で尺八を吹きながら別府の町を流して歩いた。良家の美しい娘がゆうゆうと町から町を尺八の音色をひびかせながら歩くので皆びっくりした。

多感な少女であったと思われるキミとナオが「新しい女」を気取っていたころの別府は、温泉の町として全国にその名を知られ、湯治客でにぎわっていたが、観光文化都市としては未整備で、中心街には遊郭が立ち並んでいた。熊本五高の学生であった萩原朔太郎が、別府を訪れ「さびしき町、みだらな町」と詠ったのは、明治四十年暮れのことである。紅葉館に十日ほど滞在している。そうした町で、「新しい女」であろうとした旅館の娘は、どのような人生を送ることができたのか。

資料も少なく、不明な点は多いが、現在までに判明した辛島キミの、わずか三十年足らずの〝長き旅〟を記録することで、大正時代に哲学を志し、道半ばで世を去った郷土の先人女性に敬意を表したいと思う。またこれを機に、彼女に関する情報が得られたらと思っている。

（参考文献）

辛島きみ「長き旅」『東洋哲学』一篇三号、東洋哲学研究所、一九二一年
辛島きみ「病床にて」『宇佐史談』一四号、宇佐史談会、大正十四年
是永勉『別府今昔』大分合同新聞、昭和四十一年

高橋新吉『禅に遊ぶ』立風書房、昭和五十二年
辻潤「デスペラ」『辻潤集第二巻』近代社、昭和二十九年
萩原朔太郎『ソライロノハナ』復刻版、日本近代文学館、一九八五年
三浦義一『当観無常』聖紀書房、昭和十六年
三浦義一『悲天』七宝社、昭和三十三年
三浦義一『続悲天』私家版、昭和四十八年
『牢人　三浦義一』愛国戦線同盟、昭和四十八年
『伊藤博文演説集』講談社、二〇一一年
「今日新聞」昭和三十七年一月二日
『大分教育百年史』大分県教育委員会、一九七六年
「同窓会誌」一〇～一四号、大分県立高等女学校同窓会
「東京朝日新聞」大正十二年九月二十二日
「東洋大学新聞」第六五号、昭和五年六月七日
「東洋大学百年史」東洋大学、一九八九年
『不知火』不知火社、大正十五年
『別府旅館能力調査』岡野定治、大正九年
「読売新聞」大正十一年三月

本稿は、『西日本文化』第四八三号（西日本文化協会　平成二十九年七月）より、同協会の許諾を得て転載したものである。

平成25年　亀塚古墳（大分市里）